

Title	伽耶の古代国家形成過程
Author(s)	朴, 天秀
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/40115
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	朴 天 秀 ぼく ちよん すう
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 2 6 6 5 号
学位授与年月日	平成 8 年 7 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科 史学専攻
学位論文名	伽耶の古代国家形成過程
論文審査委員	(主査) 教授 都出比呂志 (副査) 教授 東野 治之 助教授 福永 伸哉

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、朝鮮半島南部の伽耶地域における国家形成過程を考古学的方法で明らかにしようとする。まず、序章では研究史の検討と本研究の課題を以下のように明らかにする。

伽耶地域は多数の閉鎖的な山間盆地で構成されているという地形的な特徴から、全体として政治的まとまりを欠く分散的な世界としてこれまで描かれてきた。しかし、最近の諸研究では 3 世紀後葉—5 世紀前葉（前期伽耶）には金海の金官伽耶を中心に、5 世紀後葉—6 世紀中葉（後期伽耶）には高霊の大伽耶を中心に、それぞれ政治的統合が行われていたと考えられるようになった。

本論文は主として後期伽耶を研究対象として、大伽耶圏の形成背景、大伽耶圏の内部構造、大伽耶の対倭関係について考察するとともに、新羅、倭の国家形成過程との比較、国家形成に対する一般理論モデルの有効性の検討などを行ない、大伽耶社会の歴史的な位置づけを試みる。

第 1 章、大伽耶圏における墳墓の編年では、基礎作業として大伽耶圏の墳墓に関する編年を行なう。まず土器、鏡、耳飾を素材として独自の相対編年を行ない、大伽耶圏の墳墓を大きく 7 期に編年した。また百済の武寧王陵(523年)と埼玉県稲荷山古墳(鉄剣銘471年)出土資料との比較検討を通じて各期の暦年代を比定し、本研究における考察の時間軸を設定した。

第 2 章、大伽耶圏の形成と成立背景では、土器、馬具、武器などの物質的側面と、墳墓祭祀が象徴する精神的側面に着目し、大伽耶圏の形成とその背景について考察を行う。

まず、土器と埋葬儀礼などの比較によって、後期伽耶の地域圏を大きく大伽耶圏、咸安圏、晋州圏に分けた。このなかで高霊を中心とした大伽耶圏が、高霊から南海岸の港である河東へ向かう交通路の周辺に形成されていることに注目し、大伽耶圏を日常的な経済圏を超えた政治圏と考えた。この交通路は、大伽耶が479年、南斉に使節を派遣して「輔国將軍・本国王」に封じられる際の遣使の派遣ルートであると同時に、対倭交易路としても重要な役割を果たしたと考える。このことから、倭との交易が大伽耶圏形成の一つの重要な要因であると考えられる。さらに大伽耶は、このような状況のなかで、鉄や塩などの生活必要物資と首長の政治的な地位の保証につながる威信財を掌握し、一つの

経済的なまとまりを形成していたと結論する。

第3章、大伽耶圏の社会構造では、階層構造の分析を通して大伽耶圏の社会構造について考察する。まず、墳墓における殉葬などの階層的要素を分析し、大伽耶圏の墳墓に葬られた被葬者を最高首長から一般成員層まで8ランクに分類した。これら各層の存在形態を手がかりにすると、「最高首長」は高霊地域のみが存在することが分かった。また大伽耶の支配方式には直接統治方式と間接統治方式があり、大伽耶勢力は大伽耶圏内の戦略的な要衝地における在地の首長層の組織を解体させ、直接的な領域支配を実施したと考えられる。

第4章では伽耶と倭の相互作用を明らかにする。4世紀後葉—5世紀前葉を古墳時代中期の前半期、5世紀中葉—後葉をその後半期と設定し、倭における両時期の渡来系文物および製作工人の系譜とその流入のありかたを検討する。これと同時に、伽耶における倭系文物の流入のありかたを比較する。その結果、倭における渡来系文物の出自が前半期の金官伽耶圏から後半期には大伽耶圏に転換することや、伽耶における倭系文物の流入地域が金官伽耶圏から大伽耶圏に移ることを、様々な文物の型式学的研究によって明らかにした。これは、伽耶における政治的中核が金海から高霊へ移動したという政治的变化を反映するものである。またそれは、倭における5世紀後葉の雄略朝の全列島規模での政治的変動と深く関連している。つまり、この時期の伽耶と倭における政治的変動は国際的に連動した相互作用によって生まれたものであり、それが大伽耶の国家形成過程において少なからぬ意味をもっていたと考えられるのである。

なお、この時期の倭における伽耶系文物と伽耶における倭系文物の出現の背景については、従来、韓国側における一方的な文化伝播の強調があり、日本側における侵略史観による文化略奪の主張がある。両者ともに現在の民族意識と国家意識に基づいた生産的でない論争を繰り返してきたと言わざるをえない。本論文は、両地域間の交流による相互作用という視点からこの問題を再検討すべきことを主張した。

第5章、大伽耶の古代国家形成過程では、伽耶の社会発展段階を理論的に説明する。国家形成の契機としてこれまで提起された戦争説、交易説、灌漑説などの理論的検討を踏まえ、伽耶の古代国家形成過程を次のように考えた。

大伽耶は鉄山を開発し、地域内の交易と倭との対外交易を独占するなかで物資流通機構を掌握して大伽耶圏を成立させた。大伽耶圏は、圏内の諸政治体の首長層を最高首長、大首長、上位首長、下位首長として階層的に編成した政治圏である。この大伽耶圏には官人組織があり、これが権力機構を支えた。この大伽耶圏は、中心勢力である大伽耶とこれに隷属させられ、独立性を喪失した諸地域の総体から構成されており、大伽耶はその直轄下の権力機構を利用して山城の築造などの大規模な土木工事への力役動員や収奪を行ったと考えられる。

以上の考察を基礎とすると、大伽耶社会はこれまで説かれるように首長制社会の最高段階あるいは部族連合段階と位置づけることはできず、古代国家段階に到達していたと考える。伽耶の国家形成を考える場合、先にあげた3つの要因の中で交易と戦争が重要な役割を担っており、なかでも鉄を中心とする交易は特別に重要な役割を果たしたと考えられる。

終章では総括と今後の課題を述べる。本論文は、伽耶における国家形成を検討し、これまでの学説とは異なり、この社会が国家段階に達していると結論づけた。またこのケーススタディを基礎として、国家形成に関して世界各地で試みられている理論モデルを検証し、交易と戦争とが国家形成において重要な契機になっていることを確認した。また、国家形成における諸地域間の相互作用の研究が重要であることを主張した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、朝鮮半島南部における古代国家の形成過程を考古学的に追求する上で重要な貢献をした。すなわち、5世紀後半から6世紀半ばにおいて高霊地域の首長を盟主とする大伽耶圏が政治的な統合を達成していたことを考古学的方法を駆使して実証しようとしたことである。

このテーマに関する先行研究としては、金泰植の考古学的研究や田中俊明の文献史学的研究があるが、本論文は、

これら二つの研究の到達した水準を基礎にさらに理論面でも実証面でも研究を深化させ、より高い水準をめざした。その主要な点は次のようなものである。

第1に、大伽耶地域における共通習俗の形成と政治的関係の成熟を、同地域内の墳墓の編年、墳墓の階層性、陶質土器、馬具、武器、装身具などの編年や地域差および必需物資や威信財の移動の考察を基礎に丹念に裏付けたことである。この作業のうち、個別遺物の型式学的研究については先行研究を基礎としつつも、陶質土器の様式研究や胎土分析などにおいて、さらに深く分析を加えた。さらに個々の遺物を集合的に把握して有機的で総合的な考察を加えた結果、東部の金官伽耶系文物群と西部の大伽耶系文物群の違いを鮮明にすることに成功した。また、墳墓の祭祀において土器の破碎行為を伴う大伽耶圏の特徴を抽出して、新羅などとの葬送習俗の違いを解明する点でも成果があった。

以上は、大伽耶圏の形成を考古学的に証明する作業であるが、圏内の墳墓の階層性を明らかにするために、殉葬数の多寡、副葬品目の格差などを規準に統計的な比較を行い、大伽耶地域内の首長間のヒエラルヒーを明らかにして、高霊地域の首長がその頂点に立つ構造を明らかにしえた。

第2に、大伽耶地域内部における関係の考察にとどまらず、隣接地域である百濟、新羅、倭との相互作用を重視しつつ研究し、新しい研究視点を打ち出したことである。その結果、3世紀から6世紀における伽耶地域の政治的中枢が東部の金官伽耶から、西部の大伽耶に移動したことが新羅、百濟、とりわけ倭との対外関係と密接に関連することを明らかにした。とくにこの政治中枢の移動が倭における5世紀後葉の政治変動と密接な関係があることを指摘したことは日本古代史への重要な問題提起であり、本論文において最も注目される部分である。

第3に、伽耶地域におけるケーススタディを基礎に国家形成論に関する理論モデルの検証を行い、世界各地の事例との比較研究を追求していることである。とくに近年のこの種の研究において言及されることの多いPPIモデル(同位政体間相互作用モデル)の安易な適用を批判したことや、物資流通や交易が国家形成に果たした役割を重視すべきことを説いた点は、国際的な議論に積極的に貢献しようとする論者の意欲的な姿勢を示している。

以上のような、本論文にもいくつか検討すべき問題点がある。たとえば、大伽耶圏において大伽耶の直接支配地と間接支配地とを区別するための考古学的証明の手続きは十分に説得的とはいいがたく、かろうじて『三国史記』の記述による傍証によって可能性が示唆される程度にとどまっている。また、倭への鉄素材の供給地が、前半は金官伽耶地域とされるが、後半のそれが本論文の論旨からすれば大伽耶地域になるはずであるが、具体的な実証結果は叙述されていない。この地域における古代鉄生産研究の遅れによるものと考えられるが、今後の課題となろう。

また、伽耶の対外関係を取り上げるにあたって、倭との関係に焦点を絞るのは理解できるが、反面、百濟・新羅との関係が、倭との関係に比してどのような状況であったかも重要である。史料的制約は大きいにせよ、文字資料の位置づけを含め解明されるべき課題といえる。なお、倭との交易において倭からの輸出品がいかなるものであるかについて、論者は、米や塩ではないかと推定しているが、これを実証する作業が望まれる。

さらに、国家形成論に関する一般的理論モデルを視野におこうとする論者の意気込みは高く評価されるが、今後の展望を切り開くには、理論に関する過去の論争の学史的整理についての古典の十分な読み込みと、もう少し緻密な理論整理が望まれるところである。

今後改善を加えるべき以上の諸点を含むとはいえ、本論文は、博士(文学)を受けるに十分な水準にあるものと判定するものである。